二月五雲会

二月十五日（土）午後十二時始
開場 十一時
於 宝生能楽堂

12:00

弓八幡

シテ 東川尚史
ツレ 川瀬隆士
ワキ 舘田善博
ワキツレ 則久英志
〃 御厨誠吾
間 善竹大二郎
大鼓 大倉慶乃助
小鼓 住駒充彦
太鼓 梶谷英樹
笛 小野寺竜一
後見 宝生和英
野月聡
地謡 藤井秋雅
今井基
金森隆晋
佐野弘宜
和久荘太郎
東川光夫
佐野登
佐野玄宜

13:30

舟船

善竹富太郎
善竹十郎

〈休憩十五分〉

14:00

胡蝶

シテ 金井賢郎
ワキ 福王和幸
間 野島伸仁
大鼓 柿原孝則
小鼓 清水和音
太鼓 澤田晃良
笛 藤田貴寛
後見 金井雄資
木谷哲也
地謡 辰巳和磨
金野泰大
辰巳大二郎
内藤飛能
亀井雄二
小倉健太郎
水上優
藪克徳

〈休憩十五分〉

15:35

是界

シテ 小倉伸二郎
ツレ 小林晋也
ワキ 高井松男
ワキツレ 大日方寛
〃 野口能弘
間 大藏吉次郎
大鼓 原岡一之
小鼓 飯冨孔明
太鼓 林雄一郎
笛 栗林祐輔
後見 武田孝史
山内崇生
地謡 朝倉大輔
田崎甫
金森良充
當山淳司
髙橋憲正
高橋亘
大友順
澤田宏司

終演予定 十六時五十分頃

演目の解説

能「弓八幡」（ゆみやわた）

後宇多院に仕える臣下が勅命によって男山八幡宮に参詣します。初卯の祭りで賑わう人々の中に、若い男を伴い、弓を錦の袋に包んだ老人が現れ、これを帝への捧げ物と言い、臣下に渡します。袋から弓を出そうとする臣下を制し、桑の弓と蓬の矢にて世を治めた神代のことを語り、泰平の世に弓は不要なので納めるのだと説明します。自らは八幡宮の末社の神「神良」の神であると告げて夜神楽を待てと言つて消え失せ、夜半に颯爽と舞を舞って御代を寿ぎます。

狂言「舟船」（ふねふな）

西ノ宮へ遊山へ出掛ける事にした主人と太郎冠者は、神崎の渡しで舟に乗る事にしました。太郎冠者が遠くに停泊している舟に向かい「船（ふな）やーい」と呼ぶと、主人は「舟（ふね）と呼べ」と指示します。太郎冠者は古歌を引用し、昔から「船」と詠むので、正しくは「船」だと主張し、主人は「舟」が正しいと主張します。主人と太郎冠者の「舟か船か」の古歌争いに発展します。歌に詰まった太郎冠者は今度は謡で応戦しますが、その謡には「船」も「舟」も出てくるので、主人に怒られてしまいます。

能「胡蝶」（こちょう）

吉野の山奥から京へやって来た僧が、一条大宮で折から咲き誇る梅の木を眺めていると、美しい女が声をかけて現れます。不審に思つた僧が名を尋ねると、自分は蝶の化身であり、四季折々の草花に戯れる身ではあるが、唯一早春に咲く梅だけは縁がなく、僧の功徳で梅の花に戯れることが出来たらと言つて消え失せます。その夜の僧の夢に美しい蝶が現れ、僧のおかげで遂に梅の花に出会えたことを喜び、舞を舞います。

能「是界」（ぜがい）

大唐の天狗の首領是界坊は、かねがね神道の国である日本を魔道に引き込もうと決心し、日本の天狗の首領である太郎坊を訪ねて比叡山までやって来ます。是界坊は太郎坊の庵室で自らの野望を語り、太郎坊も協力を申し出て、まず日本の天台山たる比叡の御坊に襲いかからんと嵐と共に去つて行きます。場面が替わつて、比叡山の僧が勅命を受けて参内するため下山する途中、俄かに天候が悪化し、垂れ込める黒雲の中から天狗姿の是界坊が襲いかかりますが、日本の仏神の力を合わせての総攻撃に降参し、逃げ帰ります。

次回予告

二〇二〇年三月十四日（土）正午始

嵐山 大友順
忠度 高橋憲正
葵上 水上優

文化庁文化芸術振興費補助金
（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会